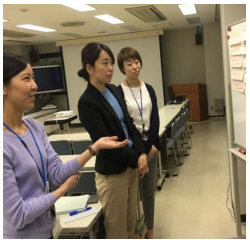
2017



第6回国際保健医療協力実務体験研修
第6回看護職海外研修
報告書

グローバル・ヘルスを担う人材の育成を目指して

グローバリゼーションの進展により、国際保健を取り巻く環境も大きく変化しています。21 世紀となり国際社会の目標として掲げられた「ミレニアム開発目標（MDGs)」は 2015 年にその達成期限を迎え、その次の 15 年間における新たな国際目標として「持続可能な開発目標（SDGs)」が国連総会で採択されました。SDGs はこれまでの MDGs とは異なり、それぞれの目標を途上国のみならず先進国も含めた国際社会全体の目標としています。また、厚生労働省が 20 年後の日本の医療を見据えその道筋を示すため 2015 年に取りまとめた「保健医療 2035」では、日本が世界の保健医療を牽引するため、グローバル・ヘルスを担う人材を官民一体となって育成し、プールする仕組みの創設が具体的に述べられています。こうした中、国際医療協力を重点分野の一つとしている、国立国際医療研究センター(NCGM)に対する期待はこれまで以上に高まっており、センターが一丸となってこの期待に応えられるよう努めることが求められています。

平成 24 年度より国際医療協力局と看護部が連携して実施している「国際保健医療協力実務体験研修」および「看護職海外研修」は、研修に参加することを通じ、国際保健医療協力の現場で活動するために必要な資質、能力、姿勢等について、実体験として広く学ぶことができるプログラムとなっています。実務体験研修では、国際医療協力局の看護職に期待される役割や、臨床現場で習得した専門的知識や経験に基づく能力の重要性について、また看護職海外研修では、保健医療の専門知識のみならず、法律や制度等幅広い分野の知識を習得するとともに、その国の歴史や文化・価値観を理解することの重要性なども学ぶこととしています。また、これらの研修は、単なる知識の習得に終わるのではなく、看護職という枠を超えて国際保健医療協力に携わる医療職・公衆衛生専門職が持つべき姿勢について、貴重な実体験として学ぶことも期待されています。

これまでに参加された研修生からは、その参加動機やそれまでの国際経験が異なるにも関わらず、研修修了後の感想として、狭い意味での「国際」への興味だけでなく、研修の中で自ら課題を認識し、明確化するとともに、それに対する今後の取り組みについて具体的に考えることができたとお聞きしています。参加者からのこうした感想は私たちにとっても大きな喜びです。また、そうした課題の解決に向け、実際に具体的な行動に移されている研修生もいらっしゃるとお聞きしており、大変うれしく思っています。

海外の国際医療協力の現場で現在活動をしている国際医療協力局の専門家たちは、めまぐるしく変化する国際社会の状況に対し、常にアンテナを高くしています。またこうして察知した変化に対し臨機応変に対応するため、専門家にはその対応に必要な知識・能力をいつでも発揮できるよう、自己研鑽が求められています。ナショナルセンターとして NCGM に求められる責務を果たすとともに、国際社会からの期待に応え続けていくためには、本研修をより発展させてゆく必要があり、そのためには国際医療協力局と看護部の連携の一層の強化が必要です。NCGM の存在意義と価値をさらに高めていくという共通の目的を達成するため、互いのモチベーションを高め合えるよう共に努力していきましょう。

国立国際医療研究センター
国際医療協力局長　日下　英司

国際保健医療分野での活躍を目指して

国立研究開発法人国立国際医療研究センターは、平成 27 年 4 月より国立研究開発法人となりました。先端的、学際的、総合的な研究の促進、ならびに新興・再興感染症及びエイズ等の感染症、糖尿病・代謝性疾患、肝炎・免疫疾患、国際保健医療協力を重点分野とし、国際保健の向上に関しこれまで以上の寄与を目指しております。センター理念として「人間の尊厳に基づき、医療・研究・教育・国際協力の分野において、わが国と世界の人々の健康と福祉の増進に貢献する」ことを掲げ、センター職員が一丸となり、医療・研究・教育・国際保健医療協力の分野に取り組んでおります。

センター病院看護部では、このセンター理念のもと、優れたジェネラリストを育成するために多くの院内研修を実施しています。なかでも、センターの重点分野である国際保健医療協力においては、国内外で活躍できる看護職員の育成に力を入れ、段階的な国際看護研修を導入し、国際保健医療協力分野で活躍できるためのキャリアパス支援を行っております。

国際保健医療協力分野で活躍する看護職員に求められるスキルは、看護に必要な基礎知識・技術を基盤とした専門知識のほか、マネジメント力や調整力、コミュニケーション力などです。これらのスキルは、臨床の現場経験から得ることのできる貴重なものですが、そこに加え、国際看護研修を受けることで「国際保健医療協力における当センターの役割・活動の理解、国内外での外国人研修に対応できる基礎知識の習得」が得られ、国際保健医療分野で活躍するための基盤づくりを可能にしております。

平成 24 年度から開始したこの研修は、日本を代表する国際協力機関であり、約 30 年の歴史をもつ当センター国際医療協力局との連携で実施しており、研修参加者からは、「身近な組織の中で、実務レベルの国際保健医療協力を体験できた」、「今後のキャリアパスを明確にすることができた」、「病棟での業務が国際保健医療協力に通じるものがあると分かった」との感想が得られております。

研修を通して得られたこのような経験は、国際保健医療協力のみならず、臨床の現場を通して人々の健康と福祉の増進に活かすことができるものであり、さらにはそれぞれが目指す看護師像の指針となっております。

看護部では今後も、看護職員自身が目指す看護師像を後押しできるキャリアパス支援を展開し、豊かな看護人材の育成に努めていきたいと思っております。

国立国際医療研究センター病院
看護部長　木村　弘江

目次

グローバル・ヘルスを担う人材の育成を目指して・・・・・・・・・・・・1
国立国際医療研究センター　国際医療協力局長　日下 英司

国際保健医療分野での活躍を目指して・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
国立国際医療研究センター病院　看護部長　木村 弘江

第１章　平成 29 年度【2017 年度】国際保健医療協力に関わる看護職研修概要
・・4

第２章　国際保健医療協力実務体験研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
1. 研修目的
2. 一般学習目標
3. 行動目標
4. 実施期間
5. 研修内容
6. 研修場所
7. 研修参加者
8. 研修評価指標
9. 研修日程
10. 研修報告会資料
11. 研修員研修報告書
12. 研修評価
13. 研修コースリーダー総括

第３章　看護職海外研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
1. 背景
2. 研修目的
3. 一般学習目標
4. 行動目標
5. 研修日程
6. 研修場所
7. 研修参加者
8. 研修評価指標
9. 研修日程
10. ラオスに関する事前課題・研修報告会資料
11. 研修員研修報告書
12. 研修評価
13. 研修コースリーダー総括

第 1 章　平成 29 年度【2017 年度】国際保健医療協力に関わる看護職研修概要

国際医療協力局
研修課

1．研修概要

センター病院および国府台病院の看護部は、「かけがえのない生命と人間性を尊重しあたたかい看護をめざします」という理念の基、病院が提供する医療を理解し、看護の専門性を高め、質の高い看護サービスを提供できる看護師の育成を目的とし、積極的に院内教育取り組んでいる。この中で看護部は、「国際的な視点から看護活動や提言ができる看護師を育成する」ことを教育目標のひとつに掲げている。

国際医療協力局は、看護部と連携を図り看護職院内教育に関する目標達成に寄与すべく、2012 年度から研修体制を、段階的に参加できるよう整備している。国際保健の基礎を学ぶためには、週末と祝日を利用した集中講座、毎月の土曜日を利用した国際保健基礎講座を実施し、海外研修を含まない内容で、できるだけ多く方々に参加いただけるような体制をとっている。

また、国際協力における業務を理解するための看護職に特化した研修として、国際保健医療協力実務体験研修と看護職海外研修の 2 コースを実施しており、国際保健医療協力実務体験研修では主に国際医療協力局に勤務する職員の国内業務を理解し、看護職海外研修では海外で実施されているプロジェクトに実際に行き、海外における活動の視察を通して、保健医療に関する国際協力活動をより理解できる内容としている。

看護職の活動を理解した次のステップとして、他職種合同で国際保健医療協力研修を実施し、ベトナムのフィールドを通して関係者と現場の状況を知り、現場での介入を体験しながら、国際保健医療協力に必要な基礎的な知識・技能を習得することを目指した研修を実施している。

また、昨年度から実施した国際保健の基礎を学んだ後の研修として、講義形式の年々変化する国際協力の潮流に対応した研修も実施し、国際協力に関わる人材育成を実施している。

なお、全体像として、看護部看護職を対象とした国際保健医療協力に関する教育機会をまとめ、次ページの表に表す。

	教育機会	対象	募集人数	期間	備考	費用 注 3)
1	国際保健基礎講座	全員 注 1)		通年（4 月 8 月は除く） 月 1 回（第 4 土曜日）	8 回以上修了証発行制度あり	1 回 1000 円
2	国際医療協力Ⅰ～Ⅲ	全員		7 月 8 日、8 月 7 日 9 月 4 日	看護部主催	
3	国際保健医療協力実務体験研修	原則 3 年目以上 4 名×2 クール	1 クール 4 名 計 8 名	11 月 13 日～11 月 17 日 2 月 19 日～2 月 23 日 1 クール 5 日間		
4	看護職海外研修	原則 5 年目以上	2 名	1 月 29 日～2 月 5 日	海外研修あり	
5	国際保健医療協力集中講座	全員 注 1)	40 名	7 月 15 日～17 日 3 日間		資料代 8000 円
6	国際保健医療協力研修	基礎講座、集中講座修了が望ましい	2 名程度	9 月 13 日～9 月 22 日 10 日間	海外研修あり	
7	国際保健中級コース（UHC と保健人材）	全員 注 1)		2018 年 3 月 3 日		資料代あり
8	国際保健医療協力サポーター制度	1、3、4、5、6 研修修了者		通年	本人の希望	

注1)　対象者数は、講義受講者総数に伴い人数制限がある。

注2)　国際医療協力基礎講座、集中講座、アドバンスコースに関しては資料代を徴収する。

以上のように看護職向けの研修を実施しているが、本報告書には看護職への特化した研修である、国際保健医療協力実務体験研修と看護職海外研修の 2 コースに関して報告する。

第２章　国際保健医療協力実務体験研修

1．研修目的：　国際的な視点から看護活動ができる看護職を養成する

2．一般学習目標：　国際医療協力局看護職の活動概要を知る

3．行動目標

(1) 国際医療協力の必要性を知る

(2) 国際医療協力局の組織体制を知る

(3) 国際医療協力局看護職の国内外での活動概要を知る

4．実施期間：　第１クール　：　2017 年 11 月 28 日（月）　～ 12 月 2 日（金）

第２クール　：　2018 年 1 月 23 日（月）　～ 1 月 27 日（金）

5．研修内容

1）国際医療協力局の紹介

2）国際医療協力局における看護職の活動等に関する講義

3）外国人研修見学

4）国際看護に関する講義見学

5）国際保健医療協力活動シミュレーション

6）国際保健医療協力に関する体験談等の協議

7）各種会議、検討会、報告会見学

8）報告書作成、提出

6.　研修場所：国際医療協力局内、他

7．研修参加者：

	参加クール	所属	氏名
1	1	16 階個室病棟	石井　真仁子
2		ACC 病棟	岡　瑞穂
3	2	手術室	西岡　友花里
4		ACC 病棟	中島　巳歌
5		ACC 病棟	末満　藍

8.　研修評価指標

(1) 研修目標の到達に関しては、自己評価を行う。

(2) 研修管理に関しては、アンケートと評価会を実施する。

9.　研修日程

（1）　第１クール

日付	時間	形態	研修内容	講師/担当
11月13日	8:30 - 9:15	協議	プログラムオリエンテーション	立石恵美子
	9:15 - 9:30		国際医療協力局長表敬	日下局長
	9:30 - 10:00	協議	プログラムオリエンテーション	立石恵美子
	10:00 - 12:00	講義	国際保健医療協力概論	仲佐部長
			休憩	
	13:00 - 14:30	講義	国際医療協力局の概要	三好部長
	14:40 - 15:40	講義	国際医療協力局看護職の活動概要	橋本千代子
	15:50 - 17:15	協議	研修実施のための情報収集、振り返り	橋本千代子 立石恵美子
11月14日	8:30 - 9:10	協議	打ち合わせ	立石恵美子
	9:10 - 10:20	見学	感染管理指導者養成研修参加（１） 「日本の結核対策の歴史」　太田正樹	太田正樹
	10:30 - 12:00	見学	研修課会議見学	橋本千代子
			休憩	
	13:00 - 14:00	講義	国際看護とは	深谷果林
	14:00 - 16:00	講義	看護職のプロジェクト活動の実際（長期専門家） 医療の質改善チーム活動について	土井正彦
	16:00 - 17:15	協議	情報収集、振り返り	橋本千代子 立石恵美子
11月15日	8:30 - 9:00	協議	打ち合わせ	立石恵美子
	9:00 - 10:00		情報収集	研修生
	10:00 - 12:00	講義 演習	研修実施のための情報収集から計画立案	立石恵美子
			休憩	
	13:30 - 16:30	見学	JICA課題別研修　院内感染管理指導者養成研修（２） 「オープンセミナー　各国のAMRの現状と対策」	宮﨑一起
	16:30 - 17:15	協議	振り返り	橋本千代子 立石恵美子
11月16日	8:30 - 9:00	協議	打ち合わせ	立石恵美子
	9:00 - 10:30	講義	医師と看護職の協働について	杉浦康夫
	10:30 - 12:00	講義	カンボジア子宮頸がんプロジェクトについて	石岡未和
			休憩	
	13:00 - 13:30	講義	センター病院看護職に期待すること	中村副看護部長
	13:40 - 14:40	協議	国際医療協力局で働く看護職の役割 看護職のキャリアパス・自分たちのキャリアパス	協力局看護職
	15:00 - 16:30		（報告会・検討会参加）	
	16:30 - 17:15	協議	振り返り	橋本千代子 立石恵美子
11月17日	8:30 - 9:30	協議	打ち合わせ	立石恵美子
	9:30 - 11:00	発表	JICA課題別研修　院内感染管理指導者養成研修（３） 「アクションプラン発表会」	宮﨑一起
	11:00 - 12:00		報告会準備	立石恵美子
			休憩	
	13:30 - 14:00	演習	報告会（協力局・看護部参加）	立石恵美子
	14:00 - 15:00		研修レポート作成	研修生
	15:00 - 15:30		国際医療協力局長報告・修了式	日下局長
	15:30 - 16:30	協議	評価会	橋本千代子
	16:30 - 17:15	協議	振り返り	立石恵美子

(2)　第 2 クール

日付	時間	形態	研修内容	講師/担当
2月19日	8:30 - 10:00	協議	プログラムオリエンテーション	宮﨑一起 松藤三紀
	10:00 - 12:00	講義	国際保健医療協力概要	三好部長
			休憩	
	13:00 - 14:00	講義	国際医療協力局の概要	明石部長
	14:10 - 15:10	講義	国際医療協力局看護職の概要	橋本千代子
	15:20 - 16:20	講義	国際看護とは	深谷果林
	16:30 - 17:15	協議	研修実施のための情報収集、振り返り	宮﨑一起
2月20日	8:30 - 9:30	協議	打合せ	宮﨑一起 松藤三紀
	9:30 - 10:00	見学	派遣連絡会議	
	10:30 - 12:00	見学	各課別会議（研修課、連携推進課・展開支援課）	
			休憩	
	13:00 - 14:00	見学	局全体会議	
	14:00 15:00	講義	医師と看護師の協働について	野田信一郎
	15:00 15:30	講義	報告会参加（ベトナム看護プロジェクト）	五十嵐恵
	16:00 16:30	講義	報告会参加（WHO執行理事会）	駒田謙一
	16:30 - 17:15	協議	情報収集、振り返り	宮﨑一起
2月21日	9:00 - 13:30	見学	看護学生への講義の見学 （現地／東京南看護学校集合）	宮﨑一起
			休憩	
	14:30 - 16:00	講義	看護職のプロジェクト活動の実際（長期専門家）	土井正彦
	16:00 - 17:15	協議	振り返り	宮﨑一起
2月22日	8:30 - 9:00	協議	打ち合わせ	宮﨑一起 松藤三紀
	9:00 - 10:00	講義	若手局員勉強会参加（元コンゴ民主共和国保健省アドバイザーとの協議）	池田憲昭
	10:00 - 12:00	演習	研修実施のための情報収集から計画立案	宮﨑一起
			休憩	
	13:00 - 13:30	講義	センター病院看護職に期待すること	中村副看護部長
	13:30 - 15:00	協議	国際医療協力局で働く看護職の役割 看護職のキャリアパス/自分たちのキャリアパス	協力局看護職
	15:00 - 16:00	見学	定期報告会・検討会参加　（開催未定）	
	16:00 - 17:30	見学	局セミナー：茉原薬剤部長「HIV感染症治療薬の進歩と服薬」	
2月23日	8:30 - 9:30	協議	打ち合わせ	松藤三紀
	9:30 - 11:30	協議	研修報告書作成/報告会準備	
	11:30 - 12:00	演習	国際医療協力局人材開発部長報告・修了式	三好部長
			休憩	
	13:30 - 14:00	演習	報告会（協力局・看護部参加）	宮﨑一起
	14:00 - 15:00		アンケート記入	研修員
	15:00 - 16:00	協議	評価会	宮﨑一起
	16:00 - 17:00	協議	振り返り	松藤三紀

10．研修報告会資料

(1)　第１クール

2017年度第１回
国際保健医療協力実務体験研修

NCGM

２０１７年１１月１７日
１６階個室病棟　石井真仁子
12東ACC病棟　　岡瑞穂

発表の目次

- １．本研修の概要
- ２．研修内容
  1)国際保健医療協力の必要性を知る
  2)国際医療協力局の組織体制を知る
  3)国際医療協力局看護職の国内外での活動概要を知る
- ３．講義や見学を通じて学んだこと
- ４．国際医療保健で求められるスキル
- ５．現時点での臨床経験が活かされるスキル
- ６．実務研修参加による自己の変化
- ７．自己課題
- ８．謝辞

１．本研修の概要

- 研修目的
  国際的な視点から看護活動ができる看護職の養成
- 学習目標
  国際医療協力局看護職の活動概要を知る
- 行動目標
  1)国際保健医療協力の必要性を知る
  2)国際医療協力局の組織体制を知る
  3)国際医療協力局看護職の国内外での活動概要を知る

２.-1)国際保健医療協力の必要性を知る

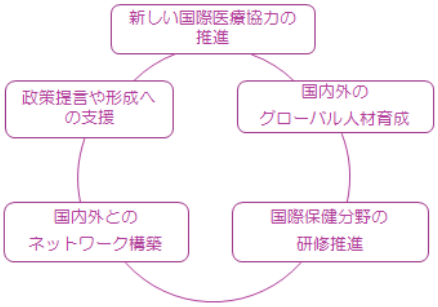
- 世界で起こっている医療問題
  貧困による医療格差
  不十分な保健医療のシステム
  母子保健・感染症・生活習慣病

↓

- 人々の健康を守るための支援が必要
  母子保健、疾病対策、保健医療人材の育成、医療の質、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジの分野

２.-2)国際医療協力局の組織体制を知る

- 活動内容



２.-3)国際医療協力局看護職の国内外での活動概要を知る

国内
- 研修員受け入れ
- 後方支援
- 国際医療協力人材育成

国外
- 長期勤務：JICA技術協力プロジェクト・個別専門家としての派遣
- 短期勤務：研究・調査活動、国際会議・学会への参加と発表、短期専門家

振り返りの様子

3．講義や見学を通じて学んだこと

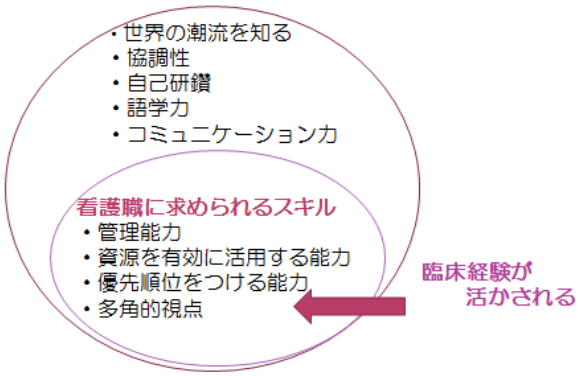
- エジプトやインドなどから参加した医療従事者に対する医療関連感染対策の研修

ファシリテーター
タイムキーパー
スタッフへの声かけ・配慮・体調管理
JICAスタッフとの連携
社会人としてのマナー
取材対応
会場設営：見やすい・聞きやすい会場作り
議事録の作成
議論から行動計画発表まで見学できたことで、研修の流れを学ぶことが出来た

- コースリーダーとして研修実施のための情報収集から計画立案

説得力のある話術の必要性
通訳さんの能力把握と良好な関係性の構築
研修参加者の要望や文化、フライト時間を配慮した日程の作成
研修参加者の健康状態・予防接種有無の把握
複数の業務の同時進行

4．国際医療保健に求められるスキル



5．現時点での臨床経験が活かされるスキル

- 根拠を考えた看護計画の実践
- 後輩育成・指導力
- 係活動：感染管理、医療安全
- 多重課題を遂行する能力
- 患者個々の意思を尊重する姿勢・接遇
- メンバーシップ・リーダーシップ
- 積極性
- 自己学習

これらをより向上させることが大切！

6．実務研修参加による自己の変化

- 国際保健に興味があるのかわからなくなった
- 今後のキャリアプランに迷っていた

- 自己課題が見つかった
- 管理能力を身につける必要性がわかった
- 仕事へのやる気がみなぎった

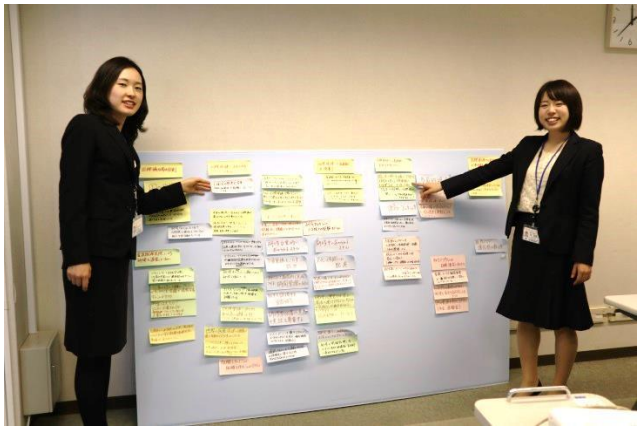
7．自己課題

臨床現場で	臨床以外で
• 根拠を考えて臨床にのぞむ • 看護管理を知る • 係活動に取り組み組織概要を学ぶ：医療安全、感染管理、後輩育成など • 組織概要を知る	• 世界情勢を知る • 語学力を身につける • 多角的視点を身につける

8．謝辞

本研修の開催に伴い、橋本課長をはじめ協力局のみなさまには大変お世話になりました。研修を通じて国際医療保健に対する意識が一層に高まり、理解を深めることができました。このような有意義な時間を提供して頂きましたことに、心より感謝申し上げます。

また研修への参加に際し、勤務調整等の配慮をしてくださった看護部の皆様に御礼を申し上げます。貴重な体験を活かし、看護に励む所存でございますので、今後ともご指導のほどよろしくお願いします。



(2)　第 2 クール

NCGM

2017年度第2回
国際保健医療協力実務体験研修

2018年2月23日
手術室　西岡友花里
ACC病棟　末満藍
中島巳歌

目次

1. 研修概要
2. 研修内容
  1)国際保健医療協力の必要性を知る
  2)国際医療協力局の組織体制を知る
  3)国際医療協力局看護職の国内外での活動概要を知る
3. 外部授業見学を通じて学んだこと
4. 国際医療保健で求められるスキル
5. 振り返りと自己課題
6. 謝辞

1．本研修の概要

研修目的
国際的な視点から看護活動ができる看護職の養成

学習目標
国際医療協力局看護職の活動概要を知る

行動目標
1)国際保健医療協力の必要性を知る
2)国際医療協力局の組織体制を知る
3)国際医療協力局看護職の国内外での活動概要を知る

2.-1)国際保健医療協力の必要性を知る

なぜ国際保健医療協力が必要なのか？

たとえば、、、
母子死亡率は30倍
3.4秒に1人の子供

★全世界の人口の約8割が開発途上国に住む
→先進国と途上国の間に許容できない格差が存在

★人やもの移動が盛んになりグローバル化
→感染症の流行などによる日本の危機
→在日外国人への医療場面が増える

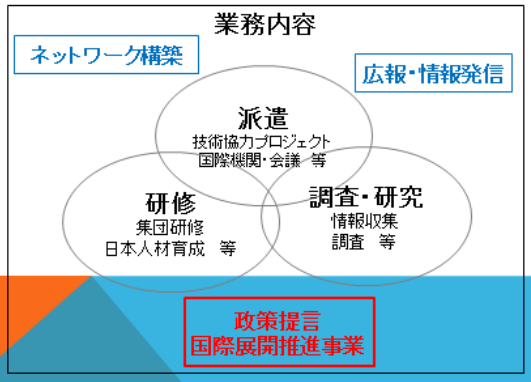
格差を埋め、世界の安全保障を！

2.-1)国際保健医療協力の必要性を知る

近年の潮流
アルマ・アタ宣言、PHC、MDGsによる
途上国の具体的な保健指標の改善から

すべての国における目標として
ポスト2015、SDGs持続可能な開発目標へ
日本を主導としたUHCの推進
→日本の政策へ反映・ODAの活用

2.-2)国際保健医療協力局の組織体制を知る



2.-3)国際医療協力局看護職の国内外での活動概要を知る

専門家活動	国内活動	緊急支援活動	調査・研究活動
・ODA技術協力 ・無償資金協力 ・調査	・研修員受入 ・後方支援 ・国際医療協力人材育成	・国際緊急援助隊 ・邦人保護	・保健人材・医療の質改善

2.-3)国際医療協力局看護職の国内外での活動概要を知る

JICAベトナム新卒看護師のための
臨床研修制度強化プロジェクト報告会

試行準備
試行実施
評価と見直し
全国展開準備

3．外部授業見学を通じて学んだこと

南東京看護学校への国際看護授業を見学
社会人としての接遇
プレゼンテーション力
タイムマネジメント力
報告書の作成
対象に合わせた講義内容の検討
対象に応じた柔軟なコミュニケーション
→動画や話題のニュースなどの活用
（対象の視点になって）

4．国際保健医療協力に必要なスキル

1．コミュニケーション力
関係者との人間関係づくり
対話する
2．異文化適応力
相手の価値観・文化の尊重
3．総合マネジメント力
自己管理を含め、限られた資源を有効活用する能力
4．専門的知識・技術
自身の知識や経験を状況に合わせて適用する力
5．教育・指導力
相手に伝える力
自己啓発による自身のアップデート
6．研究
国際保健医療の発展へ貢献

5．振り返りと自己課題

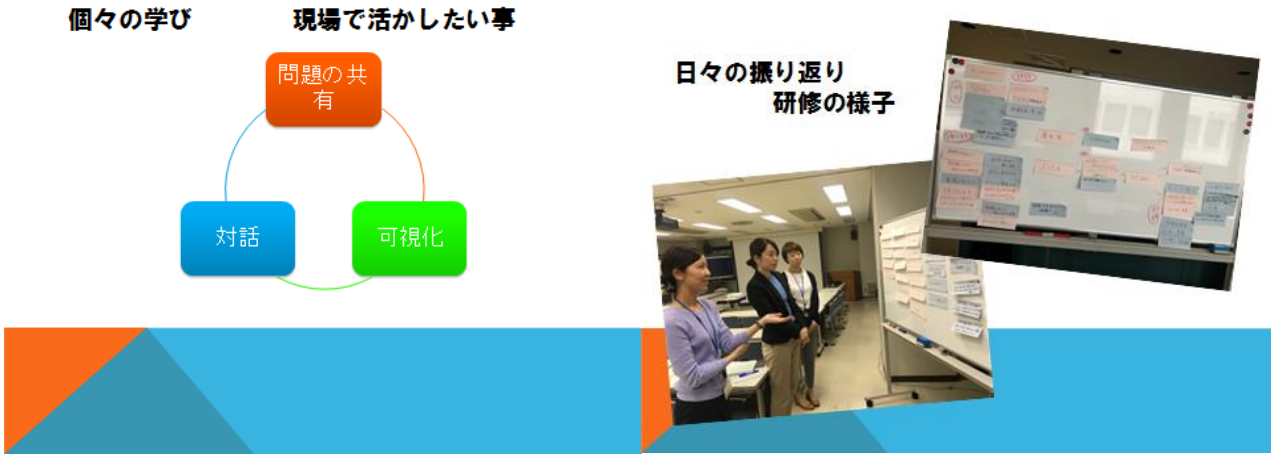
自己の課題（末満）

姿勢	・何事にも興味をもつ（アンテナを張る） ・コミュニケーション能力の向上
臨床	・総合マネジメント能力の向上 ・教育、指導力の向上（プレゼンテーション） ・自身の看護観を考え行動する
臨床以外	・自己学習、自己啓発（国内外情勢、組織の構造や運営） ・語学力の向上、維持

今後の課題とキャリアイメージ　中島

個々の学び　自身今後の課題　西岡

日本
世界
UP DATE
幅広く対応出来る能力

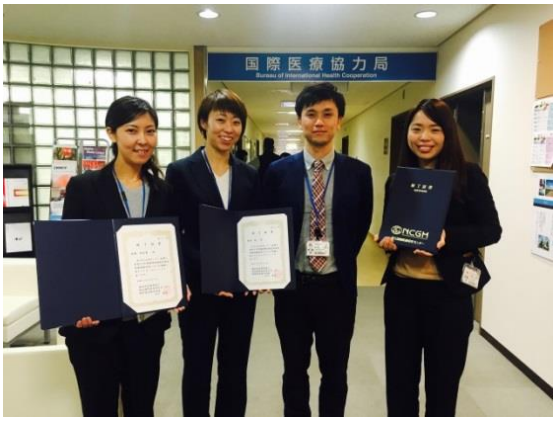


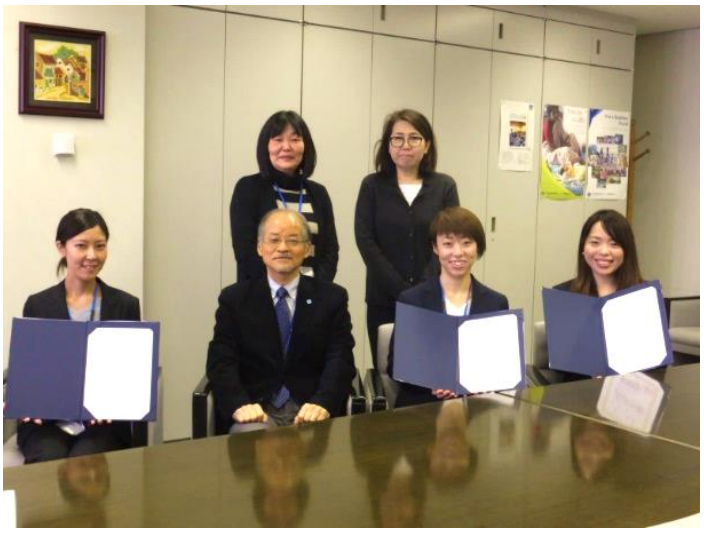
8．謝辞

本研修の開催に伴い、橋本課長、研修を調整してくださった宮崎さん、松藤さんはじめ協力局のみなさまには大変お世話になりました。

また研修への参加をサポートをし、勤務調整等の配慮をしてくださった看護部の皆様にも心から感謝いたします。各所属先での自己課題の解決に向けて努力してまいります。

ご清聴ありがとうございました。





11. 研修員研修報告書

研修報告書

研修名： 2017 年度　第 1 回　国際保健医療協力実務体験研修
受講期間： 2017 年 11 月 13 日～11 月 17 日
研修実施機関：国立国際医療研究センター
所属・氏名： 12 階東病棟　岡　瑞穂
提出日：2017 年 11 月 17 日
要約：講義や研修の見学を通じて国際医療協力局の活動概要を理解し、プロジェクト実施に向けた準備や調査について学んだ。国際医療協力に携わるために必要な能力や臨床での経験が活かされる能力を見出し、今後の自己課題を明確にすることができた。

【背景】

当院では、病院が提供する医療を理解し、看護の専門性を高め、質の高い看護サービスを提供できる看護師の育成を目的とし、積極的に院内教育に取り組んでいる。本研修は、看護師が国際保健医療協力を学ぶ機会を提供し、国際的な視点から看護活動や提言ができる看護師の育成を目指すために実施された。

【目的】

・国際医療協力局の機能や組織の運営、現行のプロジェクトを学び、国際医療に携わることを目標とするうえで必要とされる思考や知識、能力を考察する。
・国際医療協力局に所属する看護師の役割を学び、活動に対する思いや協力局に携わるまでの経緯、現在活かされている看護師としての経験や知識を知り、新たな自己課題を立案する。

【研修内容と成果】

国際医療協力局の活動や展開推進事業、JICA と協働するプロジェクトを知り、世界で求められている医療保健支援を理解することができた。
研修の流れを学ぶことで、準備や開催中に必要なスキルを学んだ。また、普段の病棟業務が発展途上国のモデルになることを知り、病棟組織の運営に関して興味を抱いた。一方、海外でのプロジェクトに関しては現地の関係者が主体的に活動できるようにする配慮が必要であり、相手の意志や文化を尊重する姿勢が求められていることも学ぶことができた。
看護職のキャリアパスについては、国際医療協力局で従事する諸先輩方のバックグラウンドや仕事への想い等の話を聞くことができ、自己課題やキャリアプランを考察する貴重な助言となった。

【所感】

今後の自己課題を見出せたことに充実感を得ている。特に、臨床での経験や知識が国際保健に通ずることに気づけたことは、大きな収穫であり病棟業務に励む意欲へとつながった。研修での学びを忘れることなく今後の経験や知識の積み重ねから、いつか国際保健に携われるように夢を諦めず精進したい。

【謝辞】

本研修の開催に伴い、橋本課長や研修担当の立石さんをはじめ国際医療協力局のみなさまには大変お世話になりました。また研修への参加に際し、勤務調整等の配慮をしてくださった看護部の皆様に御礼を申し上げます。研修を通じて国際医療保健に対する意識が一層に高まりました。研修で得た自己課題達成のために、今後の看護にも指導のほどよろしくお願いします。

研修報告書

研修名：2017 年度　第 1 回　国際保健医療協力実務体験研修
受講期間：2017 年 11 月 13 日（月）～11 月 17 日（金）
研修実施機関：国際医療協力局
所属・氏名：16 階病棟・石井真仁子
提出日：2017 年 11 月 24 日
要約：国際医療協力局に携わる医師や看護職からの講義、外国人研修の見学を通じて、国際医療協力局の役割や看護職の役割を学んだ。また同時に今後のキャリアパスについて考え、臨床現場で働く際の意欲や課題を見出すことが出来た。

【背景】

本研修は看護部の教育の一環として、国際医療協力局の看護職の活動概要を知り、国際的な視点から看護活動ができる人材を養成することを目的として開催された。私は国際医療協力専門機関として、JICA や厚生労働省などと連携して、国際保健医療協力に携わっている国際医療協力局や看護職としての役割を学びたいと思い、本研修へ参加した。

【目的】

国際医療協力局の役割と看護職の国内外での活動を学び、今後のキャリアパスに活かしていくため。

【研修内容と成果】

国際医療協力局の概要や組織体制、活動内容について講義を受けて学ぶことが出来た。また国内での看護職の活動のひとつである、コースリーダーとして外国人研修員を対象とした研修を、事例を元に立案した。これを通じて研修立案の際に、どのような準備や調整、能力が必要であるか理解した。加えて、実際に行われている会議や研修の見学を通じて、外国人研修員の体調管理やファシリテーターなどコースリーダーとしての研修実施中の役割についても学ぶことが出来た。

【所感】

国際医療協力に携わりたいと思い入職したが、臨床で働く中でその思いから遠ざかっていた。しかし本研修を通じて、臨床で行っている根拠に基づいた看護計画の実践や後輩育成、係活動といったことが、国際医療協力局で求められるスキルに繋がっているとわかり、臨床でのモチベーションの向上になった。また臨床以外では多角的な視点を持ち、世界情勢を学んでいきたいと感じた。

【謝辞】

本研修のためにご多忙にも関わらず、橋本課長をはじめ国際医療協力局の皆様に丁寧にご指導を頂けたこと、またこのような機会を与えてくださった看護部、勤務調整にご協力いただいた病棟師長およびスタッフの方々に心より感謝申し上げます。

研修報告書

研修名：2018 年度　第 2 回　国際保健医療協力実務体験研修
受講期間：2018 年 2 月 19 日～2018 年 2 月 23 日
研修実施機関：国立国際医療研究センター国際医療協力局
所属・氏名：手術室　西岡　友花里
提出日：2018 年 2 月 23 日
要約：国際協力局での活動内容と役割を学ぶ良い機会であった。自国だけでなく全世界の事情を理解するために、自身のアップブレードが不可欠であり多種多様な事に幅広く対応できる能力を身につける必要性を感じた。

【背景】
国際医療協力局での活動内容や役割を知るとともに、技術協力・人材育成・研究・緊急援助など幅広い分野でのノウハウを学び、今後の自身のキャリアパスの参考にしたいと思い国際保健医療協力実務体験研修に参加させていただいた。

【目的】
・国際医療協力局の国内外での活動概要を知る。
・今後のキャリアアップの方向性を明らかにし、そのための基盤を築く。
・国際保健医療に携わって行く上で、自身に必要な知識や技術を知る。

【研修内容と成果】
本研修では、国際医療協力局の編成や業務（主に派遣、研修、調査・研究）についての知識を得ることができた。その中で日本が世界に誇れる UHC の拡充や、全世界と達成するために掲げた SDGS への取り組みに特に興味が沸いた。また様々な分野での知識不足を痛感するとともに、自身のグレードアップを図る必要性を理解したとても有意義な研修であった。

【所感】
研修前は、国際協力・国際保健に携わる為に自分に何が必要なのかわからなかったが、本研修を通して、講師の先生方や実際に現地で活動しているスタッフの活動内容を参考に、自身の目標が明らかになった。また研修内で自分たちのキャリアパスについて相談できる機会があったことは自分にとって非常に有意義な時間となった。さらに、国内外のグローバル人材育成のための NCGM での活動内容を知り、自分が今 NCGM で勤務の傍らこうして研修に参加できていることを改めて恵まれていると実感した。

今後、自国や世界の情勢など多種多様な分野に関心を持ち幅広く対応できる能力を身につけ、当院の国際医療協力局の一員として活動していけるようにレベルアップしていきたいと考えている。

【謝辞】
本研修においてご多忙な中、宮崎さんをはじめ、ご指導して下さった協力局の皆様、また研修参加の為、勤務調整し、貴重な機会を与えてくださった、看護部、師長、手術室スタッフの皆様に深く感謝いたします。また、今回一緒に参加した研修メンバーからもいろいろと学ばせていただきました。ありがとうございました。

研修報告書

研修名：2017 年度　第 2 回　国際保健医療協力実務体験研修
受講期間：2018 年 2 月 19 日～2 月 23 日
研修実施機関：国立国際医療研究センター　国際医療協力局
所属・氏名：看護部　12 階東 ACC 病棟　中島巳歌
提出日：2018 年 2 月 26 日
要約：NCGM では国際看護研修の一環として国際保健医療協力実務体験研修を実施しており、自身のキャリアパスを検討することを目的として参加した。国際保健医療協力において求められるスキルや今後の課題を見出すことができ、研修最終日に報告会を行った。

【背景】
当センターでは平成 26 年度に策定した「NCGM のグローバル医療戦略」の中にあるように、明日の医療、看護および臨床学研究を担う医療人の育成を担っている。また、当院看護部では国際的な視点で看護活動や提言ができる看護職を育成することを教育目標として掲げており、国際医療協力局と連携の下で国際医療協力局の組織体制や看護職の活動概要を知るために実務体験研修を開催している。

【目的】
国際医療協力局の看護職における国内外の活動を知り、国際保健医療協力に求められる姿勢やスキルを学んだうえで今後の自己の課題を明確にする。あらゆる専門家の知見を得ることで今後の自身のキャリアパスを検討する。

【研修内容と成果】
講義では国際的な動向を知ることで国際保健医療協力の必要性を理解するとともに、国際医療協力局 の概要や看護職の実務を知ることができた。また、看護学校での国際看護学授業を生徒とともに聴講し、難解な内容を伝える上では対象に合わせたコミュニケーションスキルや内容の検討が必要であることを実感できた。さらに、長期専門家として派遣中の看護師による報告会に参加することでプロジェクトの実際を知ることができた。キャリア講義では協力局看護職のこれまでの経験に学び、今後の自己の課題を明確にすることができた。

【所感】
臨床経験に基づいた国際医療協力局での後方支援の在り方や、求められるマネジメントスキルについて非常に有意義な学びが得られ、病棟看護師として日々丁寧にケアを提供し、後輩育成や係活動の積み重ねをしていくことがいかに重要かを感じた。これまでは日常業務と今後のキャリアを結びつけられず困難感があったが、今後の展望を前向きに捉えられた。将来看護を背負って働ける人材になれるよう広い視野を持ちつつ、病棟における自己課題の解決に向けて地道に積み重ねてゆきたい。

【謝辞】
今回このような貴重な研修の機会を下さった看護部の皆様、勤務調整をしていただいた病棟師長、病棟スタッフ、そしてご多忙の中ご協力いただきました国際医療協力局の皆様に心より感謝いたします。

研修報告書

研修名：2018 年度第 2 回　国際保健医療協力実務体験研修
受講期間：2018 年 2 月 19 日～2 月 23 日
研修実施機関：国立国際医療研究センター国際医療協力局
所属・氏名：看護部 12 階東病棟・末満　藍
提出日：2018 年 2 月 26 日
要約：本研修に参加した目的は国際協力に関わっている看護師の活動内容を具体的に学び、自身の課題を明確にすることであった。研修を通して国際医療協力局の組織体制、業務内容と国際保健医療分野での看護職の活動概要を知り、国際協力における看護職に必要な能力や姿勢を学び、今後自身が習得するべきスキルを発見することができた。

【背景】
国際医療協力局は、国際保健医療水準の向上を目指し専門性の提供を行い、日本にその経験を還元する目的があり、業務の 1 つに国内外のグローバル人材育成がある。その一環として本研修は協力局の看護職の国内外業務を学習・体験することで、グローバル保健医療人材に必要なスキルを明確化し、将来的なキャリアビジョンを描くきっかけになることを目指し実施された。

【目的】
看護師としてのキャリアプラン形成のため、国際医療保健分野で活動する看護職の業務や必要とされる技術・能力を具体的に学び、自身の課題と今後取得するべきスキルを明確にする。

【研修内容と成果】
国際医療協力局の組織体制・業務の講義を受け、政府機関や国際機関と連携し世界の保健医療格差の是正、質の向上のため政策やシステム開発に携わっていることを学んだ。グローバル化がすすみ従来の健康問題だけでなく、新興・再興感染症等新たな健康問題への取り組みが必要であり、国や地域を基本とする従来の国際保健だけではなく世界全体でのグローバル・ヘルスという考えが主流となり、より強固で柔軟な国際保健医療協力が重要であると学んだ。看護職の国内外での活動内容に関する講義を受け、専門家としての技術協力だけでなく、世界の保健医療の向上に関わる一員として国際会議への参加、人材育成のための研修調整、組織運営等国や世界レベルで役割を担っていることを学んだ。看護師としての専門性に加え、マネジメント力やコミュニケーション力、異文化適応力、情報収集力が高いレベルで求められるため、日々臨床でこれらの能力を磨いていく必要があることを実感した。

【所感】
　本研修に参加する前は国際保健医療協力における看護師の業務として、現地に赴き対面で実際に技術提供を行うイメージをもっていたが、上記に記載した通り、専門性をもちながら広範で柔軟に活動していることを知ることができた。今後のキャリアアップのためには臨床経験が基盤になることをより強く感じたため、仕事内外で自己研鑽に努めていきたい。

【謝辞】
研修の担当の宮﨑さん、松藤さんをはじめ、国際医療協力局の皆様が丁寧に指導して下さったおかげで有意義な研修となりました。お忙しい中、時間を割いて講義をしていただいた皆様、また、研修に参加できるよう調整してくださった看護部の皆様に心からお礼申し上げます。

12. 研修評価

（1） 研修アセスメント結果（研修最終日に評価会を実施）

＊a:非常にそう思う　b:そう思う　c:どちらとも言えない　d:あまりそう思わない　e:全くそう思わない

5段階評価項目	a	b	c	d	e	回答理由および特記事項
1．研修オリエンテーションは研修日程と内容を理解する上で役立ちましたか？	4	1				• 各日程に何を学ぶか予習ができ、研修オリエンテーションと事前の資料配布はとても役立った。 • 協力局に来たことが殆どなかったので、オリエンテーションで、研修概要や局内の各課の配置など知ることが出来た。 • 具体的な研修内容、毎日の行動予定を把握できた。 • 概要を知ることで、局全体の役割が見えた。
2．5日間の研修期間は適当な期間でしたか？	3	2				• 研修スケジュールと内容ともに余裕があり、講義時間を活用して質疑応答も十分にでき、5日間の研修期間は適当だった。病棟によっては日勤扱いで5日間の参加は困難なこともあり、研修期間を短縮するのも妥当ではないかと思う。 • 始めに協力局の役割や看護職の仕事内容について講義を通じて学び、概要の知識を得ることができた。その後、実際にコースリーダーとして研修に携わる様子を見学し、看護職の役割についての知識がより一層深まった。5日間の研修期間は適切と感じた。 • 1週間で期待以上の内容を学ぶことができた。
3．国際医療協力に関する関心を高めるのに、研修内容は役に立ちましたか？	5					• 普段対談する機会の少ない先輩方の話を聞き、和やかな雰囲気の中でざっくばらんに相談でき、自己課題や今後の進路を考える道標となった。何でも質問できる場で、大変貴重な経験だった。 • 広報冊子から活動内容の一部を学ぶ機会があり、概論では協力局の活動の全体や組織運営、派遣活動の内容を知り、より一層関心が高まった。 • 外国人研修生を迎えるにあたり、具体的なコース立案の業務内容や、求められるスキルについて、体験型として理解することが出来た。またカンボジア子宮頸がんプロジェクトの講義を通じて、国外での実際の活動内容を理解し、プロジェクトへ携わっている様子が分かった。 • 全て今後のキャリア形成に有意義な研修内容だった。看護職として、人間として、国際保健医療協力に必要な能力やスキルについて学習することができたことが特に印象に残っている。 • 看護師として、人として、幅広い視野を持ち、多種多様な事に対応する能力を磨きたいと思えた。実際に働いている方の職歴等を参考に、今後のライフプランを形成したいと思った。 • 経験豊富な専門家や先輩方の貴重な知見を直接聞く機会が多く、今後のキャリアを検討する上では非常に有意義だった。ロールモデルに多く出会える機会となり、関心が高まった。不安や心配事、

						困っていることを話せる機会だった。 • 研修の企画立案から情報収集の方法について学んだので、どの様に実践されているのか、実際に見る機会があれば更によかった。機会がない場合は、ワークショップなどで簡単な企画立案などの事例が体験できると良いと思った。
4．この研修は原則として実務経験3年目以上を対象に実施していますが、この基準は適当と思いますか？	3	1	1			• 進路に迷う時期であり、後輩育成や係活動などの病棟組織の運営に携わるようになるため、少し病棟全体がみられるようになった3年目が適当だと思う。しかし、国際協力に携わることを目指す当院看護師の中には 3 年目終了時に退職する看護師もいるため、退職者の削減を狙うのであれば年度の前半に開催するか研修内容の告知を行う必要があると思う。 • 当院では実務経験 3 年後の離職率が高い傾向にあり、本研修対象を 3 年目以上にすることは、今後のキャリア形成について考える機会となり、臨床経験の大切さについて再認識することに繋がるため、適切な基準であると思う。 • 自身のキャリア形成について悩む時期のため、臨床を一旦離れ視野を広げるためにも3年目以上は妥当だと思う。2年目までは自身の看護技術を向上するので手一杯であり、3年目から後輩育成や係活動で中心的役割を担うようになるため、自己の課題をより一層見い出せるのではないかと思う。 • ある程度基礎がある人材が望ましいとは思うが、キャリアやゴールについて見つめるチャンスとなり、自分に必要な事を早期に理解し行動に移すことに繋がるため、出来るだけ早いほうが良いと思う。
5．　研修参加人数は適当でしたか？　御意見を聞かせて下さい。	• 2 名での参加は少しさみしい気持ちもありましたが、互いに協力し合いながら 1 日の学習の振り返りや報告会の資料作成ができたので、最終的には 2 人は適当でした。少人数体制で取り組むことで参加者各々が質問や意見を述べやすく、今後も同様が良いと思います。 • 自分が知らないことを他の研修員に共有してもらい、また、キャリアパスについては自分以外の考えを知る機会が大切だと感じたので、2 人以上が適切であると思います。 • 研修生も発言する機会が多くなり、より充実した学びになると思う。 • 少人数で、直接多くの話を対話形式で聞ける機会があったのでよかった。					
6．研修全体を通して感想や意見等がありましたら記入して下さい。	• 学びの多い貴重な研修を開催していただき、本当にありがとうございました。研修前は、連日の看護は大変充実しているのにも関わらず、進路で不安を抱くことが度々ありました。自己課題や進路の希望を持つことができた私にとって、研修への参加は大きな収穫です。 • 少人数の研修員に対して、手厚い丁寧な指導や講義をしていただき心より感謝申し上げます。ありがとうございました。 • 自分の中の漠然とした国際協力のイメージが少しずつクリアになり、今後自分が関わるために今できることは何か、明確にできたと感じています。今回経験したことを臨床で活かせるよう努力していきます。 • 可能であれば、今後開催される海外研修にも参加できればと考えています。5 日間で、非					

	常に充実した研修で、多くの学びを得ることができました。 • 国際保健医療協力を目指す同世代でも、後方支援の重要性に気付ける機会は少ないので、大変貴重な経験となりました。今回の研修は看護部からの研修で、日勤扱いでしたが、休日を利用しても参加したいと思える研修でした。以前私が参加した ACC 研修では外部から参加者の募集もしており、異なる背景を持つ参加者との交流が刺激になりました。今後はその様な機会があれば大変興味深いと思いました。

13. 研修コースリーダー総括

国際保健への道を志し、または将来の選択肢の一つとして看護師のキャリアをスタートしたものの、日々の臨床業務が忙しく、なかなか国際保健医療協力について学ぶ自身の余裕が持てない、現実的なキャリアも描けない。特に国際保健を志す看護職の方々は、その様な経験から自身のキャリアを悩み、国際保健への情熱が薄れ、焦りを感じることもあるのではないでしょうか。私自身、過去に本研修へ参加したことで、自分の中で将来のキャリアパスが明確になり、その後の日々の臨床業務を、より目的意識を持ち取り組むことができました。今回、研修員の方々が国際医療協力局の実務を体験し、自身の描く将来のキャリア形成の一助となる様、研修を組み立てました。

本研修で研修員の方々には、国際医療協力局職員による各種業務や経験を基にした講義を受ける他、基本的に職員と同様に会議や報告会等に参加し、実務を体験して頂きました。また、各種資料から実際の業務について情報収集を行い、その上で「研修実施の為の情報収集から計画立案」の講義で理解を深め、実際の外国人研修へ運営側の視点で参加する流れとしました。残念ながら第 2 クールに関しては、外国人研修が実施されていなかった為、講義と机上での想定した研修担当者実務の体験となりました。しかしその分、職員が看護学校で行う国際保健の講義への同席、海外長期プロジェクト派遣経験職員と実際の活動について協議する時間等を設けました。それらを通して、研修員自身が、国際医療協力局職員の国内外での活動の一端を理解し、体験することに繋げられたのではないかと思います。

また、毎日研修員同士が一日の学びを共有し発表する場を設け、各自が日々の考察を深められたのではないかと思います。最終日の報告会での発表は、研修での学び、今後への抱負など、自分の言葉で情熱を込めて発表して下さり、とても素晴らしいものでした。

最後に、本研修へご協力頂いた看護部の皆様、国際医療協力局職員、そして研修へ熱意と真意な姿勢を持って参加して下さった研修参加者の皆様へ、感謝申し上げます。

2017 年度　国際保健医療協力実務体験研修
コースリーダー　宮﨑 一起、立石 恵美子

研修担当
人材開発部　研修課長　橋本　千代子
　　研修係長　珍田　英樹
　　保健師　　立石　恵美子
連携協力部　看護師　　宮﨑　一起

第３章　看護職海外研修

1.　背景

2012 年度より当局は看護部と連携し、国際保健医療分野での活動を目指す看護職員を対象とした研修を段階的に提供するため、「看護職海外研修」開始いたしました。毎年、参加した研修生からは「活動する国の医療事情を知るだけでなく、文化や歴史を理解していることが国際保健を活動する上では、とても大切だと気づいた」「日本の制度や保健システムも学ぶ必要があると思った」といった感想が聞かれ、海外だけでなく、日本の保健医療にもあらためて目を向ける事ができる研修となっている。

2. 研修目的：国際的な視点から看護活動ができる看護職を養成する。

3.　一般学習目標：海外研修を通じて開発途上国の看護の状況と国際医療協力分野における看護職の役割と活動を理解し、自己の課題を探る。

4. 行動目標

(1) 海外研修前に、研修対象国の保健医療に関する指標等を調べる事ができる。

(2) 海外研修において、研修対象国の看護の状況と開発途上国で仕事をする看護職の役割と活動を理解できる。

(3) 海外研修終了後に、研修のまとめを行い、自己の学びを表現できる。

5. 研修日程

(1) 事前オリエンテーション

日時：初日　8：30～17：15

内容：研修概要説明・研修ねらいすり合わせ・事前課題協議・事務手続き確認

(2) 海外研修

期間：5 日間

内容：研修対象国の現場視察と日本人看護職との意見交換、医療技術等国際展開推進事業事前調査やフォローアップ・研究活動など国際医療協力局看護職の活動に同行

(3) 帰国報告会

日時：最終日 8：30～17：15

内容：研修のまとめと帰国報告発表会、報告書作成、評価会

6.　研修場所：本研修は国内と海外で実施する。

国内研修：国際医療協力局

海外研修：ラオス

7. 研修参加者：

	所属	氏名
1	救命救急センター	温水　賢慈

8.　研修評価指標

(1) 研修目標の到達に関しては、自己評価を行う。

(2) 研修管理に関しては、アンケートと評価会を実施する。

9.　研修日程

日　付	時　間	内容	講師又は視察先担当者（敬称略）	
			氏名	訪問先・所属等
1月29日(月)	8:30　～　9:30	オリエンテーション 自己紹介、協力局内紹介,研修概要、研修日程等	橋本千代子	国立国際医療研究センター　国際医療協力局研修課
	9:30　～　9:50	国際医療協局人材開発部長挨拶	三好部長	国際医療協力局 人材開発部長
	9:50　～　10:00	看護部表敬	木村看護部長	看護部　副部長室
	10:00　～　12:00	事前課題準備	橋本千代子	
	12:00　～　13:00	昼食		
	13:00　～　14:00	事前課題発表	橋本千代子 三好部長	語学研修室
	14:00　～　15:00	フィールド研修オリエンテーション 研修先概要、ねらいのすりあわせ等	橋本千代子	語学研修室
	15:00　～　16:30	局セミナー参加		協力局会議室
	16:30　～　17:15	フィールド研修オリエンテーションの続き・航空券配布	橋本千代子	語学研修室
	23:30	羽田空港集合	橋本・久保山	
1月30日（火）	1:30	羽田 JL079/S		
	5:50	ホーチミン　着		
	12:00	ホーチミン　発 QV516/M		
	13:35	パクセー（ラオス）着		
		ホテル移動後　土井、深谷と合流、翌日の WS について確認		
1月31日(水)	8:00	展開推進事業　WS 参加		チャンパサック保健科学短期大学
	12:00　13:00	JICA ラオス南部保健医療サービスの質改善プロジェクト訪問　プロジェクト看護長期専門家の活動概要	橋爪専門家	ラオス南部保健医療サービスの質改善プロジェクト事務所
2 月 1 日（木）	9:00　～　11:30	チャンパサック県病院見学		チャンパサック県病院見学
	13:00	ホテル出発		
	14:20	パクセー（LA）　QV516/M		
	15:35	ビエンチャン着		

2 月 2 日(金)	10:00 ～ 11:30	マホソット病院訪問、病院、看護部概要説明、外科 4 病棟見学	アポンさん	副院長
	12:00	ラオス拠点事務所	ノイさん拠点スタッフ	ラオス国立熱帯公衆衛生研究所
	14:00 ～ 15:00	JICA ラオス事務所訪問　健康管理員、在外職員（看護師）の活動概要説	青木　職員	企画調査員
		保健省アドバイザーJICA 専門家　小原ひろみ先生訪問、ラオスにおける保健省アドバイザーの活動概要	JICA 長期専門家	保健省事務所
		ラオス拠点事務所（清算作業）		
	18:35	ビエンチャン発　　QV445/M		
	19:35	バンコク着		
	22:05	バンコク発		
2 月 3 日	5:40	羽田着 JL034/K　翌日の予定等確認		
2 月 4 日		休日		
2 月 5 日（月）	8:30 ～ 9:00	予定の確認、半券提出、アンケート記入		
	9:00 ～ 12:00	報告書作成	橋本千代子	
	12:00 ～ 13:00	昼食		
	13:00 ～ 15:30	報告会準備	橋本千代子	
	15:30 ～ 16:00	報告会	橋本千代子	
	16:00 ～ 16:30	修了式・国際医療協力局 局長へ報告	日下英司 橋本千代子	国際医療協力局長
	16:30 ～ 17:15	評価会	橋本千代子 土井・深谷	

10.　ラオスに関する事前課題・研修報告会資料

第7回看護職海外研修報告
平成29年度1月29日～2月5日

国立国際医療研究センター
看護部　7階東病棟
看護師　温水賢慈

目標

＜学習目標＞

海外研修を通して開発途上国の看護の状況と国際医療協力分野における看護職の役割と活動を理解し、自己の課題を探る。

＜行動目標＞

1. 海外研修前に、研修対象国の保健医療に関する指標などを調べることができる。
2. 海外研修において、研修対象国の看護の状況と開発途上国で仕事をする看護職の役割と活動を理解できる。
3. 海外研修終了後に、研修のまとめを行い、自己の学びを表現できる。

行動目標1.

海外研修前に、研修対象国の保健医療に関する指標などを調べることができる。

ラオス人民民主共和国の基本情報[1)]

- 気候：内陸国、熱帯モンスーン気候
- 面積：24万㎢(≒日本の本州:約22万㎢)
- 総人口：約649万人(2015年)
- 宗教：仏教
- 民族：ラオ族(全人口の約半数以上)を含む計49民族
- 政治：人民民主共和制、ブンチャン・ヴァ―ラキット国家主席、国民議会、一党制(149名)
- 経済：名目GDP：約117億米ドル(2014年、ラオス中央銀行)、サービス・農業・工業が主流、GDP成長率7.6%、GNI1人当たり：1,730ドル

歴史[1)2)]

※青文字は看護に関する歴史

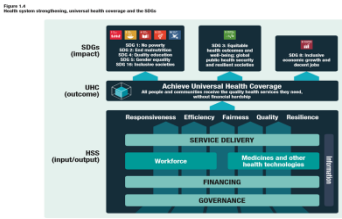
1353年　ランサーン王国として統一
1899年　フランスのインドシナ連邦に編入される
1953年　仏・ラオス条約により完全独立
1975年　ラオス人民民主共和国成立
1986年　「新経済メカニズム」と呼ばれる経済革命に着手
2002年　初の看護大学教育の開始
2005年　ヘルスケア法
2005～2010年　JICA看護人材育成強化プロジェクト：看護助産に関する規則・ガイドライン等の活用と普及
2006年　第8回党大会：2020年までにLDC脱却を目指す方針
2007年　看護助産規則
2011年　第9回党大会：2015年までに年8%の成長率、1人当たりGDP：1700ドル、MDGs達成を目指す
2012～2016年　母子保健人材開発プロジェクト
2015年　ASEAN経済共同体開始と相互承認協定：免許資格制度普及の必要性、看護助産関係法規集
2016年　2025年、2030年までの長期開発計画が承認

看護職における日本とラオスの違い[1)2)3)]

	日本	ラオス
法律	1948年　保健師助産師看護師法公布	2006年　ヘルスケア法
UHC	ユニバーサル	19.6%(2012年)
保健医療に関する取り組み	・2025年までに地域包括ケアの実現を目指す ・保健師のキャリアラダー策定 ・ナースプラクティショナー制度の構築	・2020年までにLDC脱却 ・MRAsで看護教育システムの強化 ・マホソット病院がモデルとなって、病院、大学での連携強化 ・免許制度の確立を推進 ・看護師コンピテンシー向上のためのカリキュラム改訂

法律から見ると約60年の遅れがある

保健医療指標　for the SDGs[4)5)]



ラオスの母子保健は、世界に比べ水準が低い(3.1,3.2)
結核が多く、NTDs介入の必要者が多い(3.3)
日本は、ラオスに比べて自殺率がやや高い(3.4)

	3.1		3.2		3.3					3.4	
	妊産婦死亡率(10万出生当たり)	専門保健従事者が立ち会い下での出産の割合(%)	5歳未満死亡率(1000出生当たり)	新生児死亡率(1000出生当たり)	15-49歳の内の新規HIV感染者数(非感染者1000人当たり)	結核感染者数(10万人当たり)	マラリア感染者数(リスク下で1000人当たり)	3回のB型肝炎ワクチンを受けた幼児(%)	NTDs介入を必要とする人々の報告数	30～70歳のうち、心血管疾患、がん、糖尿病、慢性呼吸器系疾患における死亡率(%)	自殺率(10万人当たり)
	2015	2005-2016	2015	2015	2015	2015	2015	2015	2015	2015	2015
日本	5	100	2.7	0.9	-	17	-	-	10	8.8	19.6
ラオス	197	40	66.7	30.1	-	182	20.9	89	218万	25.8	12.3
世界	216	78	42.5	19.2	0.5	142	94.0	84	15億	18.8	10.7

ラオスは、日本に比べ環境汚染があり、地域保健の遅れがある(3.6～3.b)
アルコールのみラオスより日本がやや多い(3.5)

	3.5	3.6	3.7		3.9			3.a		3.b	
	1人当たりの15歳以上のアルコール摂取量(純粋なアルコールの年間、十歳未満を除く)	道路交通事故による死亡率(10万人当たり)	近代的手法を講じた家族計画へのニーズを持つ女性可能年齢にある女性の割合(%)	青年期の出生率(15～19歳女性1000人当たり)	家庭内及び周囲の大気汚染による死亡率(10万人当たり)	安全でない WASH(水、保健、衛生)サービス曝露による死亡率(10万人当たり)	非感染性の大気汚染による死亡率(10万人当たり)	15歳以上の年齢調整した喫煙率(%)		1歳児のDTP3予防接種率(%)	医療研究と一人当たりの基本的保健に対する公的な開発援助の純額(2014年ドル)、受取国による
								男性	女性		
	2016	2013	2005-2015	2005-2014	2012	2012	2015	2015		2015	2014
日本	7.8	4.7	-	4.4	24.2	0.1	0.5	33.7	10.6	96	-
ラオス	7.3	14.3	61.3	94.0	108.3	13.9	1.3	56.6	9.1	89	5.65
世界	6.4	17.4	76.7	44.1	92.4	12.4	1.5	-	-	86	1.16

ラオスは、日本、世界より医療者、保健予算が低い(3.c,1.a)
公衆衛生の割合が約70%であり(6.1,6.2)、
5歳未満の発達阻害の蔓延度が世界より高い(2.2)

	3.c	3.d	1.a	2.2			6.1	6.2
	熟練した医療従事者の密度(10万人当たり)	11国際保健規則(IHR)コアキャパシティ・スコアの平均値	総政府支出のうちの総保健支出	5歳未満児のうち発達阻害の蔓延度(%)	5歳未満児のうち栄養失調(高身長の蔓延度(%)	5歳未満児のうち栄養失調(体重)の蔓延度(%)	安全に管理された飲料水サービスを利用する人口の割合(%)	安全に管理された公衆衛生サービスを利用する人口の割合(%)
	2005-2015	2010-2016	2014	2005-2016	2005-2016	2005-2016	2015	2015
日本	130.9	100	20.3	7.1	2.3	1.5	100	100
ラオス	10.4	75	3.4	43.8	6.4	2.0	76	71
世界	45.6	73	11.7	22.9	7.7	6.0	91	68

ラオスは、日本、世界よりクリーン燃料が少なく(7.1)、
殺人が多い(16.1)
自然災害による死亡率は、日本が高い(13.1)

	7.1	11.6	13.1	16.1		17.19
	クリーンな燃料を主要としている人口の割合(%)	都市部における微粒子物質(PM2.5)の年平均濃度(μg/m³)	自然災害による千人当たりの死亡率(10万人当たり)	殺人行為による死亡率(10万人当たり)	主要な紛争による暴力関連死亡者(10万人当たり)	死亡原因データの完全さ
	2014	2014	2011-2015	2015	2011-2015	2005-2015
日本	>95	12.9	4.2	0.3	<0.1	100
ラオス	<5	33.5	0.2	6.9	0.0	-
世界	57	43.1	0.3	6.4	2.0	48

事前課題での疑問点

- ラオスで、国家試験などの制度を取り入れる際に経済的・文化的障害が生じることで、時間を要してしまうことがあるか。また、新しい制度を取り入れることにより現地人の満足度が低下することはないか
- 将来的にラオスの経済が発展し、日本のように少子高齢化になると仮定すると、現時点で在宅も加味した保健医療の支援を行っていくべきか
- ラオスの文化から日本が学べることはないか

行動目標2.

海外研修において、研修対象国の看護の状況と開発途上国で仕事をする看護職の役割と活動を理解できる。

海外研修日程

日付	研修場所	内容
1/29	NCGM　国際協力局 羽田→ラオス(パクセー)	オリエンテーション、事前課題発表
1/30	パクセー着	WSについての確認
1/31	チャンパサック保健科学短期大学 JICAプロジェクトオフィス	NCGM展開支援事業　WS JICAジュニア専門員より活動内容説明
2/1	チャンパサック県病院 パクセー→ビエンチャン ラオスJICA事務所	病院内見学 JICA企画調査員より活動内容説明
2/2	マホソット病院 保健省 ラオス→羽田	病院内見学、副院長より病院説明 JICAシニアボランティアより活動内容説明 JICA保健省アドバイザーより活動内容説明

2/2 チャンパサック県病院

- 規模：県立、250床、小児・産婦人科・内科・外科それぞれで病棟が分かれている
- 急性期はICU、NICU、救急外来あり

NICU：母親の低栄養による影響で
　　低出生体重児となっている
ICU：9床、点滴・胃管、人工呼吸器なし
救急外来：100名/日の搬送(救急車＜walk in)、
　　疾患は交通外傷、デング熱など、
　　看護師がトリアージするが明確な基準なし

2/3 マホソット病院

- 規模：国立、約400床、3次施設あり
- 中国の支援で改築予定
- 疾患：内科にて、下痢が多い(40～50名/日)
- 年に2～3回、アメリカ、オーストラリアなどの医師が各2週間、口腔外科手術を行う

病院の状況について

- それぞれの施設は2～3次レベルの病院であるが、人工呼吸器や点滴ポンプなどのME器機は十分に配置されていない。
- 看護学生がベッドサイドでケアに入っており、実習指導者や現場の看護師は学生に比べて不足している印象。
- マホソット病院の口腔外科のようにアメリカやオーストラリアなど他国からの支援を要することがある。

2/1 ワークショップ in チャンパサック保健科学短期大学

- 目的：「看護臨床指導能力強化」研修後の活動の共有
- 保健省、大学、病院共同で開催
- 各セクターよりパワーポイントにて活動内容を説明
  保健省：看護の質向上のためのサポート
  大学：ABCDEによるフィジカルアセスメント、SBARによる報告を活用
  病院：指導者や教材を増やすなどのアクションプラン
- 発表内容についてディスカッション：教育者の人手不足、テキストなどの物品不足、教え方など

国際保健に関わる看護師の活動・役割 NCGM 展開推進事業

- 触媒：直接支援するのではなく、現地の方が自発的の活動ができるよう働きかける。
- 信頼関係：一緒に食事をとるなど、現地の文化に触れる中で、距離を縮める。
- キーパーソンとの調整：NCGM拠点員、保健省の方
- 柔軟性：各国の文化に合わせて、会場設営を行う。

国際保健に関わる看護師の活動・役割 JICAプロジェクト専門家

- 職種・学位：RN、MPH、MW

＜業務内容＞

- 看護管理＞技術支援
- 病院のガイドラインの把握、調整
- 保健省や大学などとの調整
- ラオスの文化に沿って支援する

国際保健に関わる看護師の活動・役割 JICA 企画調査員

- 職種・学位：RN、MPH

＜業務内容＞

- ラオスからの要請を受け入れるかどうかを会議を通して選別。
- 外務省、JICAとの協議のもと、要請受け、プランニング
- 大学教授、文科省と徐々に協働者を広げてコミュニケーションする

国際保健に関わる看護師の活動・役割 JICA シニアボランティア

- 職種・学位：RN、MW

＜業務内容＞

- 看護管理
- 各看護師の能力に偏りが見られないように調整

＜困っていること＞

- 言語の壁で、末端の看護師の声を聴くのが難しい

まとめ 国際保健に関わる看護師の役割・活動

- 点滴や清拭などの直接的支援より、ガイドラインやマニュアルの調整を行うような活動が多い印象。
- 看護職のみならず、外務省、大学教員など業種を超えて、連携・調整を行うことがある。
- 現地の文化に適合した形で支援を行っている。

ラオスの文化から学んだこと

先進国だが、独居の多い日本
途上国だが、家族、地域の親密性が高いラオス

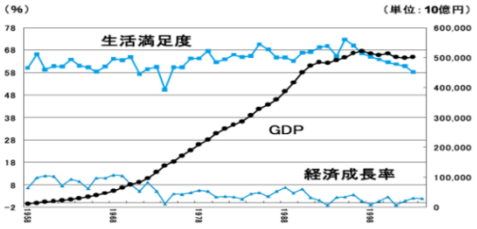
例）

・人生の最期は必ず、家族と一緒に自宅で迎える

・家族が患者の清拭を行う

→経済的指標のみならず、満足度や幸福度も含めた指標の必要性を感じた

幸福パラドックス[1)]



生活満足度：国民生活に関する世論調査（内閣府）2003
経済成長率・GDP：経済社会総合研究所（内閣府）2003，2005
図2 GDPと生活満足度

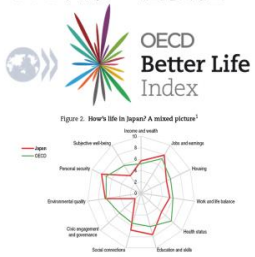
国内の幸福度指数の取り組み[2)]

表 4. 国内の幸福度指標の取組事例

	内閣府 「幸福度に関する研究会」 2010 年 12 月	荒川区 荒川区総幸福度（GAH）に関する区民アンケート 2013 年 10 月	新潟市 NPH(Net Personal Happiness)	北海道斜里町 斜里町民アンケート調査 2012 年 6 月
指標 （主要軸）	・経済的社会状況 所得・仕事・住環境 子育て・教育・安全 ・心身の健康 身体的健康 精神的健康 ・関係性 個人・家族のつながり 地域・社会とのつながり ライフスタイル	・健康・福祉 運動・食生活・休息 孤立感・自分の役割 安らぎ 医療機関 福祉の充実 ・子育て・教育 ・薬業 ・環境 ・文化 ・安全・安心	・子ども ・安心・安全・温かい家庭生活 ・やりがいのある仕事・経済的ゆとり ・社会とのつながり・連帯・信頼 ・高齢者	・幸福度について 判断基準・重視事項 ・家計状況 ・住宅 ・子育てや（教育・教育環境） ・仕事 ・社会制度 ・健康 ・家族との関係 ・地域社会との関係 ・文化や自然等との関係
調査対象	―	荒川区	政令指定都市	斜里町

各資料により作成

GDPのみならず、
満足度を指標とするBetter Life Index[3)]やHappy Planet index[4)]などを指標とした政策の必要性



行動目標3.
海外研修終了後に、研修のまとめを行い、自己の学びを表現できる。

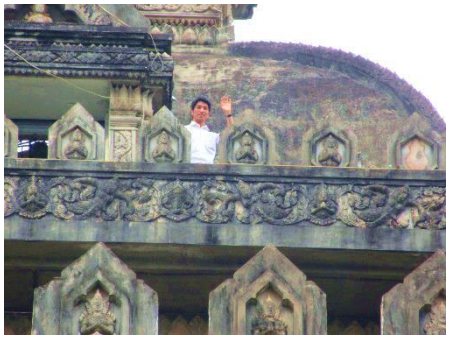
今後の課題

- 政治、経済、文化などの視点も含めたマネジメント能力を向上させ、多職種での連携・調整を行う。
- 経済的指標とともに幸福度や満足度などを加味した対策を検討する。
- 日本人として他国から学ぶべきシステムや文化などを取り入れられるよう働きかける。

参考・引用文献

- 国立国際医療研究センター 国際協力局 ライブラリー
http://kyokuhp.ncgm.go.jp/library/index.html
- 外務省国別データブック http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/press/shiryo/page1w_000019.html
- 外務省 ラオス 基礎データ http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/index.html
- WHO Country profile http://www.who.int/violence_injury_prevention/road_safety_status/country_profiles/lao_people_s_democratic_republic.pdf?ua=1
- The world bank country report
- JICA ラオス事務所
- JICA ナレッジサイト

1) 医療者が認識すべき格差の影響、http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA02718_01
2) 吉中希子他、福祉政策における「幸福度」指標の予備的考察-家族主義モデルからの検討-、名寄市立大学 道北地域研究所 年報 第32号、2014年3月
3) OECD, Better life index, http://www.oecdbetterlifeindex.org/#/11111111111
4) nef, happy planet index, http://happyplanetindex.org/



11．研修員研修報告書

出張報告書

出張件名：平成 29 年度第 6 回看護職海外研修
出張国：ラオス人民民主共和国　　派遣期間：平成 30 年 1 月 29 日～2 月 5 日
依頼機関：国際医療協力局　　出張者：温水　賢慈
活動要約：事前にラオス人民民主共和国の基本情報や保健医療指標の学習を行った。現地の病院見学をし、国際医療協力に従事する日本人看護師と関わり、看護の状況、日本人看護師の役割・活動を知った。それらを理解した上で、政治、経済、文化など多面的にマネジメントしていく能力を向上させるという自己課題を見出した。

[背景]

国際医療協力局は、発展途上国の医療や保健衛生の向上を図るため、技術支援や途上国からの研修員を受け入れている。また、日本の国際保健医療協力を担う人材の養成を行っており、その一環として看護職員を対象とした看護職海外研修を実施している。

[目的]

海外研修を通して発展途上国の看護の状況と国際医療協力分野における看護職の役割や活動を理解し、自己の課題を探る。

[活動内容とその成果]

１．事前にラオス人民民主共和国の基本情報や保健医療指標について学習した。

２．現地では、チャンパサック保健科学短期大学にて国際医療協力局主催のワークショップに参加し、国際医療協力局の看護師が触媒としての役割を担っていることを理解した。また、JICA プロジェクト専門家、企画調査員、シニアボランティアの看護師と対談し、文化に適応してガイドラインの整備をしているなどの役割・活動を知った。病院見学では、チャンパサック県病院、マホソット病院へ訪問し、2～3 次の病院での看護の状況を把握した。

３．ラオス人民民主共和国の看護の状況や日本人看護師の役割・活動をまとめ、政治、経済、文化など多面的にマネジメントする能力を向上するという自己課題を見出した。

[所感]

日本人看護師が試行錯誤しながら、現地の文化を尊重して、適応し、さまざまなカウンターパートと連携調整を行っていく姿をみて、看護領域を超えて、政治、経済、文化などの領域も考慮して介入していく重要性があると感じた。

[謝辞]

本研修の貴重な体験を通して、国際保健協力における自己課題を見出すことができました。本研修の企画運営をしていただいた国際医療協力局の皆様、貴重な機会を与えてくださった看護部長、看護師長へ心から感謝を申し上げます。

12.　研修評価

研修内容の評価結果（5段階評価項目）	a	b	c	d	e	回答理由および特記事項
研修オリエンテーション		1				日程スケジュールや資料をファイルされたものでオリエンテーションがあり、流れはつかめた
5日間の海外研修は適当か		1				体調面を考慮すると初めての海外研修は5日でよい
5年目以上は参加基準として適当か	現在の教育にはラダーがあるため、5年目くらいが調度よい					
語学能力は参加条件に必要か	より実践的にするのであれば語学能力の基準は必要だと思う					
参加人数は	研修生間での話し合いができるように2人以上はいたほうがよい					
目標達成は	役立った研修項目はワークショップへの参加であり、次際にNCGM主催で行っている事業に参加して、イメージする一部分となった。					
研修の構成で不足していた点は	NCGMメイン事業へ参加すると思っていたため、JICAに関する情報収集ができていなかった。可能であれば医師や他職種の事業も参加できればと感じた					
研修での学びを生かした自己の課題への取り組みは	保健システムや経済システムに関する知識を深める。 国内外を含め、国際保健に関わる人々のつながりを広める					

13.　研修コースリーダー総括

国際医療協力局では看護職への研修として、国際保健医療協力実務体験研修と看護職海外研修の 2 コースを実施しており、国際保健医療協力実務体験研修では主に国際医療協力局に勤務する職員の国内業務を理解し、看護職海外研修では海外で実施されているプロジェクト等に実際に行き、海外における活動の視察を通して、保健医療に関する国際協力活動をより理解できるよう段階的に研修を実施している。今年度の参加者も昨年度の国際保健医療協力実務体験研修を経て本研修に参加していただいた。

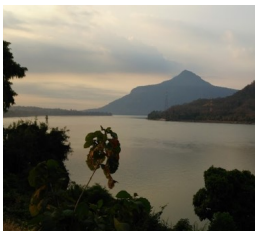
今年度は、国際展開推進事業の看護案件で実施しているラオスでの指導者能力強化を図るためのワークショップを研修の一部として組み入れ実施した。研修報告では国際協力ではマネジメントが重要としている中で、実際の活動を直に局看護職と実施していくことで「日本人看護師が試行錯誤しながら、現地の文化を尊重して、適応し、さまざまなカウンターパートと連携調整を行っていく姿をみて、看護領域を超えて、政治、経済、文化などの領域も考慮して介入していく重要性があると感じた。」と述べており、歴史的背景も含め、実際に現場でなければ感じ取れないことを学んでいただけたのではないかと考える。

2 名の枠がある中、1 名での実施となり、研修員同士での振り返りや情報共有等ができず、来年度は 2 名での実施が望まれる。

実務体験研修から海外研修と段階を踏まえて局看護師の役割を知っていただくとともに、研修参加者が自己の課題を見出すことができ、本当に国際協力を実施していきたいかということを考える一助となれば幸いである。また、研修実施に伴い、看護部の皆様、参加者を送り出していただいた病棟の皆様、また、研修実施にご協力いただきました関係者の皆様に感謝いたします。

2017 年度　看護職海外研修
コースリーダー　橋本　千代子

研修担当
人材開発部　研修課長　橋本　千代子
研修係長　珍田　英樹
看護師　土井　正彦
看護師　深谷　果林



NCGM